

# 「かな文字を読む」

## ～『源氏物語』の秋の表現を埼玉の先人たちと味わう～」 解説

### 1、奥貫家文書について

- ・入間郡久下戸村(現 川越市久下戸)奥貫家
- ・当館に寄託。3437点、近世文書に加えて典籍も多く残されている。

奥貫家

五代目友山は、寛保2年(1742)の大水害の際の救済等により著名。

名主として村政に努めるほかに、寺子屋をひらき教育にあたった。儒学者。

→典籍が多い。

### 2、『源氏物語』について

平安中期の長編物語。五四巻。紫式部作。長保三年(一〇〇一)以後の起筆とされるが成立年代は未詳。(中略)

主人公光源氏は藤壺宮との過ちにおののきながら、愛の遍歴ののち、準太上天皇となる(第一部。藤裏葉巻まで)。しかし託された女三の宮と柏木との密通事件によって過去の罪の報いを知り、苦悩のうちに生涯を終える(第二部。幻巻まで)。つなぎの三帖を置いて、いわゆる宇治十帖は、柏木と女三の宮との罪の子薫(かおる)を主人公に、競争者匂宮と宇治の姫君たちを配し、暗い愛の世界を描く(第三部)。仏教的宿世観を基底にし、平安貴族の理想像と光明が、当時の貴族社会の矛盾と行きづまりを反映して、次第に苦悶と憂愁に満ちたものになっていく過程が描かれ、「もののあわれ」の世界を展開する。(後略)

(「源氏物語」『日本国語大辞典』小学館)

- ・奥貫家の写本『源氏物語』について

『源氏物語』には、主人公である源氏が亡くなることを暗示し、巻名のみ存在する「雲隠」という巻がある。奥貫家本には、この「雲隠巻」が独立した一冊として存在する。その内容は、北村季吟『源氏物語湖月抄』と同様の文章。

また、『源氏物語引歌』という別の注釈書が、同じ仕立てで一括されている。

『源氏物語湖月抄』も『源氏物語引歌』も近世によく流通した『源氏物語』注釈書であり、それらを取捨選択して取り合わせた資料と考えられる。

ただ、『源氏物語湖月抄』からは、注釈部分が多く削られている。本文の検討や、注釈の選択が行われた資料といえる。

- ・「かな」文字読解の練習 『源氏物語』注釈書たくさん出ているので、近い本文がたくさん活字化されている。→練習がたくさんできる。

No.	一般的な巻名	文書番号	目録表題
1	桐壺	2969	源氏物語（きりつば）（源氏誕生より十二才まで）（写本）
2	帚木	2973	源氏物語（源氏十六歳）（写本）
3	空蝉	2988	源氏物語（源氏十六才）（写本）
4	夕顔	2972	源氏物語（源氏十六才）（写本）
5	若紫	2970	源氏物語（源氏十七才）（写本）
6	末摘花	3006	源氏物語（源氏十七才より十八才の春まで有）（写本）
7	紅葉賀	2985	源氏物語（源氏十七才ノ十月ヨリ明年ノ十月マテアリ）（写本）
8	花宴	2978	源氏物語（源氏十九才宰相中將正三位迄）（写本）
9	葵	3010	源氏物語（朱雀譲御位につき給、源氏廿一才の事アリ）（写本）
10	賢木	3004	源氏物語（源氏廿二才の九月より廿四の夏まで有）（写本）
11	花散里	3003	源氏物語（源氏廿四才の夏の事あり）（写本）
12	須磨	2971	源氏物語（すま）（源氏廿五才より次ノ三月までアリ）（写本）
13	明石	2996	源氏物語（あかし）（源氏廿六才ノ三月より廿七才まで有）（写本）
14	滯標	2977	源氏物語（源氏廿七才帰京次年廿八才十一月迄有）（写本）
15	蓬生	3022	源氏物語（よもきふ）（源氏廿七八才ノ事アリ）（写本）
16	関屋	2993	源氏物語（せき屋）（源氏廿八才九月晦日石山詣ノ事アリ）（写本）
17	絵合	3015	源氏物語（ゑあはせ）（源氏卅才三月の頃迄、廿九才ノ事不見）（写本）
18	松風	2984	源氏物語（源氏卅才の事アリ）（写本）
19	薄雲	3023	源氏物語（うす雲）（源氏卅才より卅一才の秋までの事あり）（写本）
20	朝顔	3001	源氏物語（源氏卅一才九月ヨリ冬ノ末マテ有）（写本）
21	少女	2994	源氏物語（をとめ）（源氏卅二才ノ三月ヨリ卅四才十月マデ有）（写本）
22	玉鬘	3000	源氏物語（源氏卅五才の三月より十二月まであり）（写本）
23	初音	2979	源氏物語（はつね）（源氏卅六才ノ正月の事あり）（写本）
24	胡蝶	3009	源氏物語（源氏卅六才ノ三四月ノ事アリ）（写本）
25	常夏	3013	源氏物語（とこなつ）（源氏卅六才ノ六月ノ事有）（写本）
26	蛩	2980	源氏物語（源氏卅六才ノ五月ノ事あり）（写本）
27	篝火	2989	源氏物語（かがり火）（源氏〔卅〕六才ノ時始ノ事有）（写本）
28	野分	3007	源氏物語（源氏卅六才ノ八月ノ事有）（写本）
29	行幸	2975	源氏物語（源氏卅六才、十二月ヨリ卅七才ノ二月迄有）（写本）
30	藤袴	3002	源氏物語（源氏卅七才の八九月ノ事アリ）（写本）
31	真木柱	2998	源氏物語（まきはしら）（源氏卅七才ノ十月ヨリ卅八才ノ秋迄アリ）（写本）
32	梅枝	2982	源氏物語（源氏卅九才ノ正月二日ノ事アリ）（写本）
33	藤裏葉	3005	源氏物語（源氏卅九才ノ三月ヨリ十月迄の事有）（写本）
34	若菜上	2981	源氏物語（もみちの賀）（女三ノ宮裳着ノ事外三ヶ年ノ事あり）（写本）
35	若菜下	3014	源氏物語〔わかな〕（源氏四十一才より四十七才ノ事有）（写本）
36	柏木	3024	源氏物語（かしは木）（源氏四十八才ノ正月ヨリ秋ノ末迄アリ）（写本）
37	横笛	2999	源氏物語（よし笛）（源氏四十九才二月迄ノ事アリ）（写本）
38	鈴虫		
39	夕霧	2997	源氏物語（夕きり）（源氏五十才ノ時）（写本）
40	御法	2991	源氏物語（源氏五十一才ノ春より秋までの事あり）（写本）
41	幻	2992	源氏物語（まほろし）（源氏五十二才ノ正月ヨリ十二月までをしるせり）（写本）
41.5	（雲隠）	3021	源氏物語（雲隠〔 〕）（写本）
42	匂宮	2986	源氏物語（写本）
43	紅梅	2974	源氏物語（薫廿一、廿二才ノ事アリ）
44	竹河	3008	源氏物語（写本）
45	橋姫	3016	源氏物語（はし姫）（かおる十九才ノ事有）（写本）
46	惟本	2987	源氏物語（薫廿才の春より廿一才の夏迄有）（写本）
47	総角	3011	源氏物語（あけまき）（薫廿一才秋ヨリ冬マテアリ）（写本）
48	早蕨	3012	源氏物語（薫廿二才ノ春の事あり）（写本）
49	宿木	2990	源氏物語（薫廿二才夏より廿三才ノ四月まで有）（写本）
50	東屋	2983	源氏物語（薫廿三才ノ秋迄）（写本）
51	浮舟	2995	源氏物語（薫廿四才ノ春ノ事アリ）（写本）
52	蜻蛉	2976	源氏物語（薫廿四才ノ春より秋まであり）（写本）
53	手習	3017	源氏物語（手ならひ）（薫廿四才ノ春より廿五才ノ春まで有）（写本）
54	夢浮橋	3018	源氏物語（夢のうき橋）（薫廿五才ノ春より夏まで有）（写本）
		3019	源氏物語（系図）（写本）
		3020	源氏物語（源氏物語引歌）（写本）

### 3、場面の前提

#### ・ここまでの各人物の状況

○源氏(六条院、大殿)=この巻では49歳。冷泉天皇の後見として太政大臣となり、栄華の象徴ともなる居所六条院を構え、40歳には冷泉天皇より、准太上天皇の待遇をうけた。その後、兄朱雀院出家の際に、女三の宮を降嫁される。この事により、正妻紫の上をはじめとした妻たちのバランスが崩れる。また、女三の宮と柏木とが密通。薫が生まれ、若き日の罪の報いを受ける。

○夕霧(大将の君)=源氏と葵上の子供。この巻では28歳で、大将。柏木が重態の際に見舞いに行き、柏木・女三の宮・源氏・薫の関係をそれとなく<sup>ほの</sup>灰めかされ、源氏とのとりなしと、落葉の宮への配慮を依頼される。その後、柏木と源氏との関係を気にしている。また、雲居雁(この巻では30歳)という正妻がいるにものの、落葉の宮に心を動かされている。

○落葉の宮(一条宮)=一条にある御殿に住まう落葉の宮。この巻では柏木の妻。作中で年齢は明示されていない。

○一条御息所=朱雀院の御息所。一条宮(落葉の宮)の母。柏木は婿だった。早くして夫を亡くした落葉の宮を不憫に思う。

○柏木(故大納言)=致仕の大臣(葵上の兄)と四の君の子。笛の名手。朱雀帝から源氏の許に降嫁された女三の宮への想いが立ち切れず、密通。女三の宮に薫を身ごもらせる。源氏に露顕。女三の宮、源氏、柏木はそれぞれの苦しみを抱え込む。柏木はこの苦しみに病となり、33歳で死亡。

○女三の宮=朱雀院から、源氏へ降嫁されたものの、柏木と密通。薫を出産後。この苦しみにから、出家。この巻では23歳もしくは24歳。

○薫=表向きは源氏と女三の宮の子。実際は、柏木が女三の宮と密通して生まれた子。この巻では2歳。

#### ・横笛巻 この場面のあらすじ

源氏が49歳の年。前年2月に33歳で亡くなった柏木の一周忌がめぐってきた。光源氏や夕霧は特別な思いで供養を営んだ。夕霧は柏木の遺言を不審に思いながらもその真相を源氏に確かめられずにいた。

その秋、夕霧は故柏木の妻落葉の宮(一条の宮)とその母一条御息所を見舞う場面。夕霧、が一条宮を訪れ、御息所に対面し柏木を回顧する。その後夕霧は、柏木遺愛の和琴を弾く。そして、夕霧、落葉宮にも琴を所望する。夕霧、想夫恋を弾き、落葉宮との贈答をする。

この見舞いの際に、柏木遺愛の笛を渡され、疑惑の源氏との対面へつながっていく。また、一条院の秋の風景描写は、実生活である日常的な雲居雁との生活と対照されていく。



#### 4、校訂本文

秋の夕のあはれなるに、一条宮を思ひやりきこえたまひて渡りたまへり。うち解け、しめやかに、御琴どもなど弾きたまふ程なるべし。「深くもえ取りやらで、やがてその南の廂に入れたてまつりたまへり。端つ方なりつる人の、ゐざり入りつるけはひどもしく、衣のおとなひも、大方の匂ひ香ばしく、心にくき程なり。例の御息所対面したまひて、昔の物語ども聞こえかはしたまふ。我が御殿の、明け暮れ人繁くもの騒がしく、幼き君たちなど、すだきあわてたまふにならひたまひて、いと静かにものあはれなり。うち荒れたる心地すれど、あてに気高く住みなしたまひて、前栽の花ども、へ虫の音しげき野辺と乱れたる夕映えを、見わたしたまふ。和琴を引き寄せたまへれば、律に調べられて、いとよく弾きならしたる、人香にしみて、なつかしうおぼゆ。「かやうなるあたりに、思ひのままなる好き心ある人は、静むることなくて、様あしきけはひをもあらはし、さるまじき名をも立つるぞかし」など、思ひ続けつつ掻き鳴らしたまふ。故君の常に弾きたまひし琴なりけり。

をかしき手一つなど、すこし弾きたまひて、「あはれ、いとめづらかなる音に掻き鳴らしたまひしはや。この御琴にも籠りてはべらむかし。うけたまはりあらはしてしがな」とのたまへば、「琴の緒絶えにし後より、昔の御童遊びの名残をだに、思ひ出でたまはずなんなりにてはべめる。院の御前にて、女宮たちのとりどりの御琴ども、試みきこえたまひしにも、「かやうの方はおぼめかしからずものしたまふ」となむ、定めきこえたまふめりしを、あらぬ様にほれぼれしうなりて、ながめ過ぐしたまふめれば、へ世の憂きつまに、といふやうになむ見たまふる」と聞こえたまへば、「いと道理の御思ひなりや。限りだにある」とうちながめて、琴は押しやりたまへれば、「かれ、なほ、さらば、声に伝はることもやと、聞きわくばかり鳴らさせたまへ。ものむつかしう思ふたまへ沈める耳をだに明らめはべらむ」と聞こえたまふを、「しか伝はる中の緒は、ことにこそはべらめ。それをこそ承らむと聞こえつれ」とて、御簾のもと近く押し寄せたまへど、とみにしも承け引きたまふまじきことなれば、強ひても聞こえたまはず。

月さし出でて曇りなき空に、羽翼うちかはす雁がねも、列を離れぬ、うらやましく聞きたまふらむかし。風肌寒く、ものあはれなるに誘はれて、箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも、奥深き声なるに、いとど心とまり果てて、なかなか思ほゆれば、琵琶を取り寄せて、いとなつかしき音に想夫恋を弾きたまふ。「思ひ及び顔なるは、かたはらいいたけれど、これは言問はせたまふべくや」とて、切に簾の内をそのかしきこえたまへど、ましてつつましきさし答へなれば、宮はただものをのみあはれと思し続けたるに、

(夕霧)言に出でて 言はぬも言ふに まさるとは 人に恥ぢたる 気色をぞ見る  
と聞こえたまふに、ただ末つ方をいささか弾きたまふ。

(落葉)深き夜の あはればかりは 聞きわけど ことよりほかに えやは言ひける

#### 5、語句の解説

○深くもえ取りやらで——来客の為「御琴ともなど」を片づけようとしたが、できなかった。

○南の廂に——寝殿造り 奥から（寝殿）母屋↓廂↓簀子↓庭

主人である一条御息所と落葉宮は母屋に居る。

身分の低いものには庭、次いで簀子に通される。

特別親しい間柄である夕霧は、その更に内側の廂に通されている。

続文に女房たちが退いてるように、あまり来客が入る所ではない。

○衣のおとなひも——女房の退出した南相の様子。女性の様子は、手紙や文字、香、女房達の様子などから読み取る。

○昔の物語ども——一条御息所と夕霧に共通する「むかしの物語ども」は、一条御息所の亡き婿で落葉の宮の夫、夕霧の親友であった柏木の事。

○我が御殿の——夕霧の居所三条の宮に慣れているので、よけい静かに感じる。

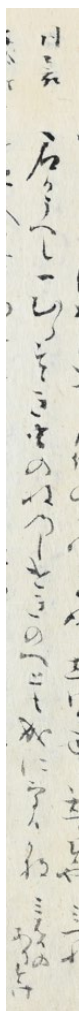
○すだきあわてたまふに——すだく『集く』白力四 ①群がり集まる ②(虫や鳥などが)鳴く

○前栽の花ども、へ虫の音しげき野辺と乱れたる夕映え——引歌表現。

「君が植ゑしひとむら薄虫の音繁き野辺ともなりにけるかな」(古今集・哀傷・御春有助)

手入れをするべき主人を失った植え込みに虫の音が悲しく響いているさま。この歌のように、当場面も主人である柏木を失い「うち荒れたる心地すれ」と手入れのままならぬ様が描かれ、光景と同じくしてそこにいる落葉の宮たちの心を思いやる。(なお、このような光景を事前に想定した柏木の巻をも踏まえる。)

虫の音は、悲しい秋の景物として詠まれている。



(奥貫家文書3020『源氏物語引歌』)

○律に調べられて——律という調子に合わせる。チューニング。「短調風のやわらかな調べ」といわれる。

○人香にしみて、なつかしうおぼゆ——和琴に染み付いた香に親しみを覚え、かき鳴らすうちに、故柏木の琴だったと気づく。「故君の常に弾きたまひし琴なりけり」。

○「かやうなるあたりに、——夕霧の心内。好き心ある人を想定する。この後、夕霧自身が落葉の宮に迫って行ってしまうので、自身の事となってしまう。

○「あはれ、いとめづらかなる音に掻き鳴らしたまひしはや。——かつて、上手にこの琴を弾いていた柏木の技術に感嘆する。

○うけたまはりあらはしてしがな——夕霧が落葉の宮に琴を弾いてほしいと頼む。



○「琴の緒絶えにし後より、——夕霧が落葉の宮に演奏を勧めるものの反応がないので、母一条御息所が返答する。「琴の緒絶え」る事に、夫の柏木が亡くなった意味を持たせる。落葉の宮は夫柏木が亡くなって以来、朱雀院に認められた演奏の腕前も、まるで童遊のような初歩の演奏でさえもできず、ぼうっとして過ごしている事を説明する。

「亡き人は訪れもせで琴の緒を絶ちし月日ぞかへり来にける」(大納言道綱の母 蜻蛉日記)を引くともいわれる。

（奥貫家文書3020『源氏物語引歌』）

○おぼめかしからず——おぼめかし 形シク ①はつきりしない よくわからない②不安だ、気がかりたい ③とぼけている

——ここでは「あらぬ」と否定されているので、「ぼけてよくわからない、はつきりしない琴の音」ではなく、「並みひととおりでない、はつきりとした格別な音」のこと。

○ほればれし——惚惚れし、ひどくぼけている。ぼうっとしている。ほけほけしとも。

○へ世の憂きつまに、といふやうになむ見たまふ——引歌表現。

「浅茅生の小篠が原に置く露ぞ世の憂きつまと思ひ乱るる」(出典未詳 源氏釈)

※つま 妻・端

落葉の宮は、琴に対して辛い思い出だと思っている。

（奥貫家文書3020『源氏物語引歌』）

○いと道理の御思ひなりや。——夕霧は、一条御息所の説明を聞いて、納得、同情する。

○限りだにある——引歌表現

「恋しさの限りだにある世なりせば年へてものは思はざらまし」(古今和歌六帖・坂上是則)『限りだにある』の歌のように、この世では限りなく恋しい思いが続くことです。

（奥貫家文書3020『源氏物語引歌』）

○琴は押しやりたまへれば、「かれ、なほ、さらば、——夕霧は琴を、一条御息所の方へ押しやった。それに対して、一条御息所が、落葉の宮に対して声をかける。

○「かれ、なほ、さらば、声に伝はることもやと、聞きわくばかり鳴らさせたまへ。——さらば、と夕霧が勧めてくれるのだからと、落葉の宮を促す。「声に伝わる」柏木の音が夫婦の間で伝わっていることもあるだろうと、一条御息所からも聞かせてほしいという。

○「しか伝はる中の緒は、こゝにこそはべらめ。それをこそつけたまはらむとは聞こえつれ」とて、御簾のもと近く押し寄せたまへど、——一条御息所の発言を聞いた夕霧も、柏木の音が落葉の宮に伝わっているのであれば聞きたいといい、琴を再び落葉の宮の方へ押しやる。

○とみにしも承け引きたまふまじきことなれば、強ひても聞こえたまはず。——そうはいっても落葉の宮は引き受けない。

○月さし出でて曇りなき空に、羽翼うちかはす雁がねも、列を離れぬ、うらやましく聞きたまふらむかし。——秋の景物に準えて、柏木と落葉の宮の仲を思う。羽翼うちかはす雁がねは比翼の鳥の連想。引歌。

「白雲に羽うち交わし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月(古今集・秋上・詠み人知らず)」

（奥貫家文書3020『源氏物語引歌』）

○風肌寒く、ものあはれなるに誘はれて、箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも、——落葉の宮も心動かされ、少し弾く。

○奥深き声なるに、いとど心とまり果てて、なかなか思ほゆれば、——奥深い音色に夕霧はますますもつと聞きたくなる。

○琵琶を取り寄せて、いとなつかしき音に想夫恋を弾きたまふ。——落葉の宮に続きを促すために、もしくは趣が乗ってきたので続けようとして、夕霧は琵琶を取って、想夫恋を弾く。

○思ひ及び顔なるは、かたはらいいたけれど、これは言問はせたまふべくやとて、切に簾の内をそのかしきこえたまへど、——夕霧は夫を想うという曲を弾いたので、遠慮するポーズをしつつも、落葉の宮の反応を求める。

○ましてつましきさし答へなれば、宮はただものをのみあはれと思し続けたるに、——頻りに催促するが、落葉の宮は「想夫恋」に対しなおさら慎重になり、複雑な心境になっている。

○(夕霧)言に出でて言はぬも言ふにまさるとは人に恥ぢたる気色をぞ見る——夕霧が歌を読みかける。言葉に出さない慎み深い思いなのですとねと落葉の宮に問いかける。引歌。「心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる」(古今和歌六帖)

（奥貫家文書2020『源氏物語引歌』）

○と聞こえたまふに、ただ末つ方をいささか弾きたまふ。——落葉の宮は、夕霧の歌を聞いて、想夫恋の終わりの方を少し弾く。言うのではなく行動で示した。ただそれだけでなく、返歌もしてしまう。

○(落葉)深き夜の あはればかりは聞きわけど、ことよりほかにえやは言ひける——秋の深い夜の趣と夕霧の心は理解するが、「こと」琴で返答するよりほかない。「言葉」で答えたのではない(あなたが言い寄る気持ちに応えたのではない)。

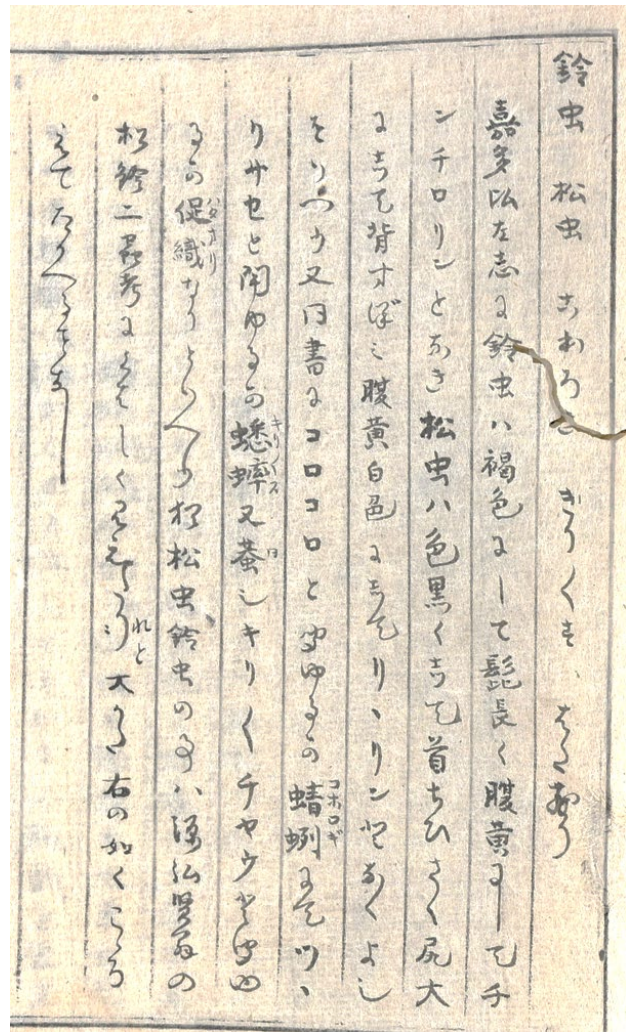
※『源氏物語』の解釈は多くの書籍が出ている。参考にして自主練習できる。



6、埼玉の先人と味わってみよう1 井上喜文 と 和学者・国学者たち

古典の表現は、近現代まで親しまれている。虫の表現を比べてみよう。

・井上喜文『雅言集説 貳』 井上家文書103

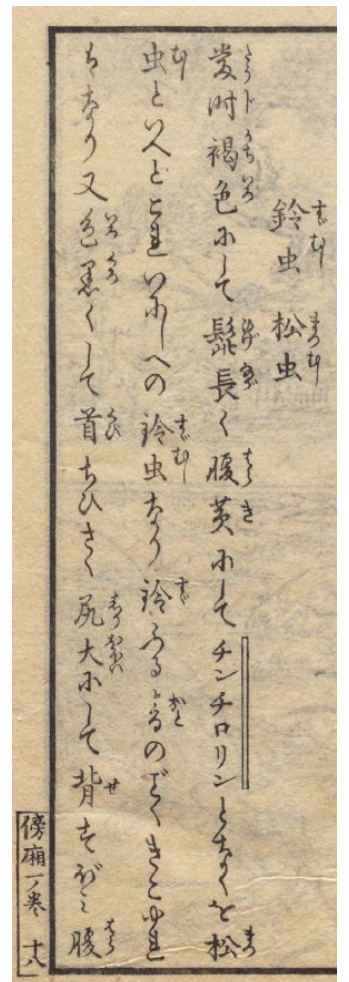


鈴虫 松虫 こおろぎ きりくす はたおり

嘉多比左志に鈴虫は褐色にして髭長く腹黄にしてチンチロリンとなき 松虫は色黒くして首ちひさく尻大にして背すばみ腹黄白色にしてリ、リンとなくよしをいへり 又同書にコロコロと聞ゆるか蜻蛉にてツ、リサセと聞ゆるか蟋蟀又蜚也キリくチャウと聞ゆるか促織なりといへり 猶松虫鈴虫の事は源弘賢翁の松鈴二蟲考にくはしく見えたゆれど大かた右の如くころえてたかえる事なし

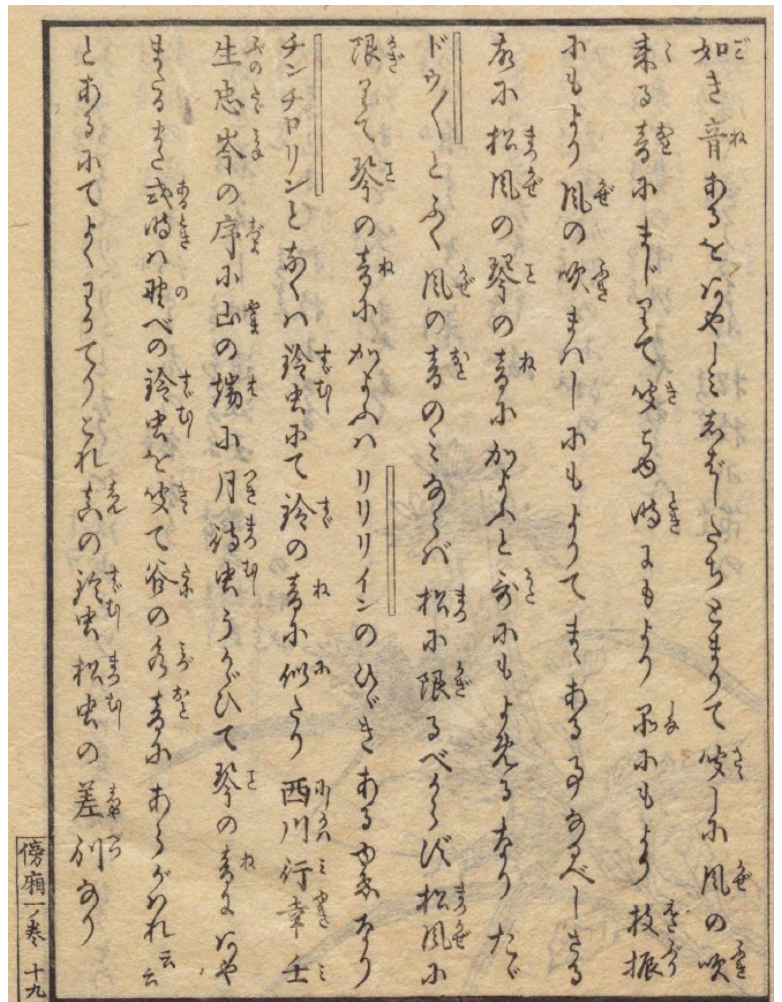
○井上喜文 入間郡石井村(現坂戸市石井村)の名主、国学者。幕末、明治時代に活躍。父は井上淑蔭。

・斎藤彦磨『嘉多比左志(傍廂)』内閣文庫 (国立公文書館 DA CC0)



○斎藤彦磨 (1768—1854) 江戸時代後期の国学者。賀茂季鷹、伊勢貞丈、本居大平に生学ぶ。





翻字

鈴虫 松虫

当時褐色にして髭長く腹黄にしてチンチロリンとなくを松

虫といへどこれいにしへの鈴虫なり 鈴ふる音のごときこゆれ

はなり又色黒くして首ちひさく尻大にして背すぼみ腹

黄白色にてリ、リンとなくを鈴虫といへどこれ 松虫なりそは

松風の音に似たる故の名なり

おのれ若かりし時遠江国

秋葉山にて松枝にさる

ひびきあるを聞てあやしく、

思ひ居たりそは年の  
くれの事なり其後

三河国宝飯郡の小江の

松葉を春の中頃にやあらん

夜深く通りつるに松枝に笛の

如き音あるをあやしみしばしたちとまりて聞しに風の吹

来る音にまじりて聞こゆ時にもより品にもより技振

にもより風の吹きまはしにもよりてまゝある事なるべしさる

故に松風の琴の音にかよふはと歌にもめるなりたゞ

ドウ／＼とふく風の音のみならば松に限るべからず 松風に

限りて琴の音にかよふリリリンのひびきあるゆゑなり

チンチロリンとなくは鈴虫にて鈴の音に似たり西川行幸壬

生忠岑の序に山の端に月待虫うかゞひて琴の音にあや

またるまた或時は野べの鈴虫を聞て谷の水音にあらがはれ云云

とあるにてよくわかつてりこれ真の鈴虫 松虫の差別なり。

○屋代弘賢「松鈴二蟲考」『古今要覧』

○鈴虫

・鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな（『源氏物語(桐壺)』）

↓鈴↓振る(降る)

・年経ぬる秋にもあかず鈴虫のふりゆくままに声のまされば（『後拾遺集』秋上・公任

↓鈴↓振る(古る)

○松虫

・秋の野に人まつ虫の声すなり我かとゆきていざとぶらはむ（『古今集』秋上・詠み人知らず

↓松↓待つ

などなど

和歌の上では実体の重要性が薄い



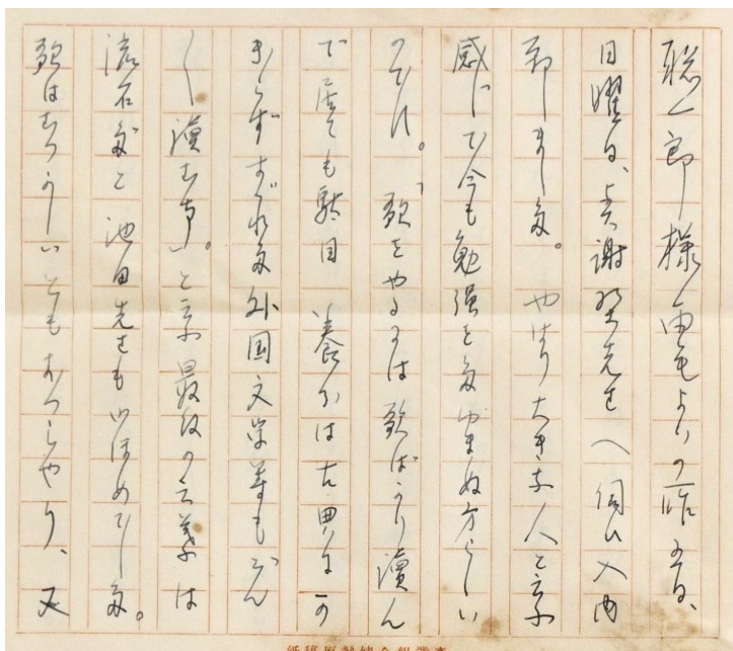
## 7、埼玉の先人と味わってみよう2 濱梨花枝 榎本美佐夫 と 与謝野晶子

○埼玉県出身の近現代の歌人に濱梨花枝（1912―1998）がいる。

↓今の埼玉県行田市埼玉出身で、当館には生家の湯本家文書が収蔵されている。  
湯本家文書の中には、湯本家当主総一郎（弟）と濱梨花枝（榎本美佐夫）（姉）  
との手紙が残されている。親しい間柄でのやり取り。

その中で、当資料は濱梨花枝が師匠の与謝野晶子の家に行った際の事をか  
いたもの。与謝野晶子と源氏物語研究者池田亀鑑とその弟子濱梨花枝との関  
係性がわかる。

・湯本家文書9592 （消印：昭和15年5月7日）



聡一郎様雨もよいの一昨五日、

日曜日、与謝野先生へ伺い入門

致しました。やはり大きな人と云ふ

感じで今も勉強をたゆまぬ方らしい

のです。歌をやるには歌ばかり読ん

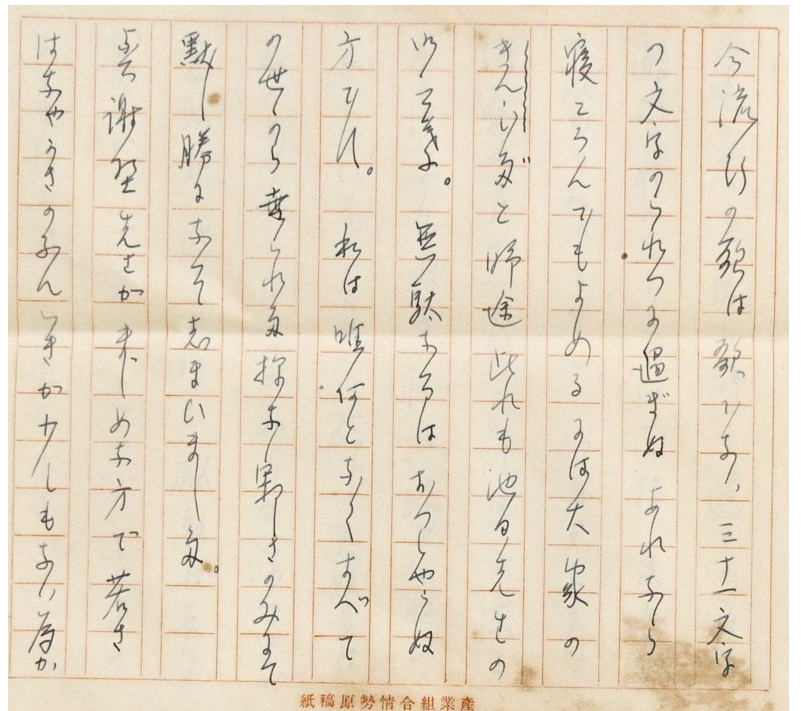
で居ても駄目養分は古典にか

きらずすぐれた外国文学等もどん

／＼読む事。と云ふ最後の言葉は

流石だと池田先生も御ほめでした。

歌はむつかしいとおつしやり、又



今流行の歌は歌でなし、三十一文字

の文字のられつに過ぎぬあれなら

寝ころんでもよめるには大家の

きんじだと帰途此れも池田先生の

御言葉。無駄な事はおつしやらぬ

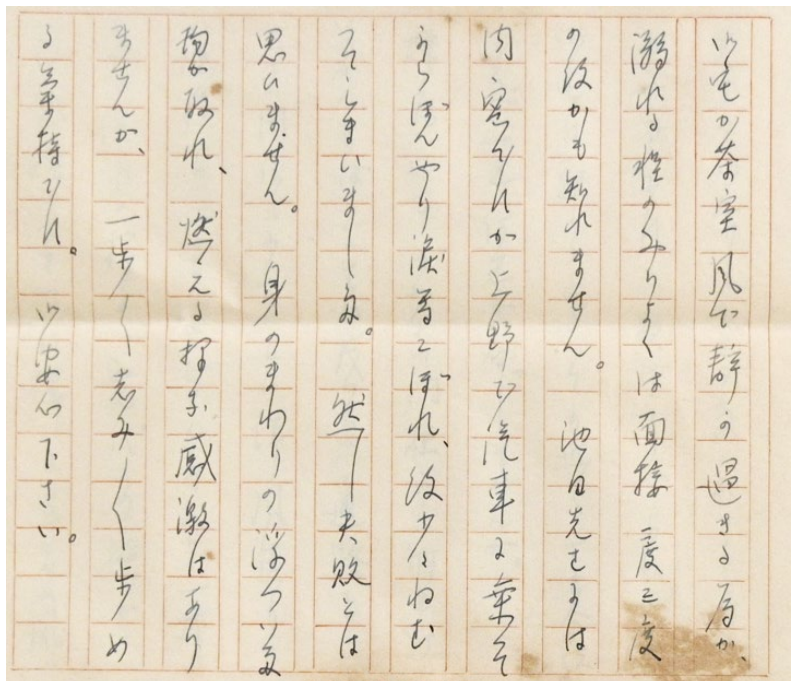
方です。私は唯何となくすべて

の世から去られた様な寂しさのみにて

黙し勝になつてしまひました。

与謝野先生がまじめな方で若さ

はなやかさのふんいきが少しもない為か



御宅が茶室風で静か過ぎる為か。

溺れる程のみりよくは面接二度三度

の後かも知れません。池田先生には

内密ですが上野で汽車に乗つて

からぼんやり涙等こぼれ、後少々ねむ

つてしまいました。然し失敗とは

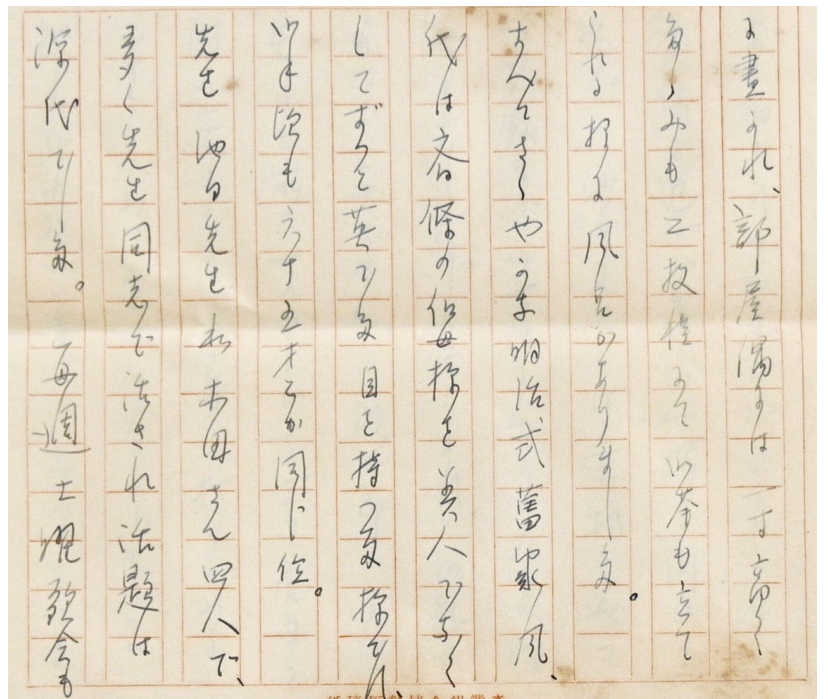
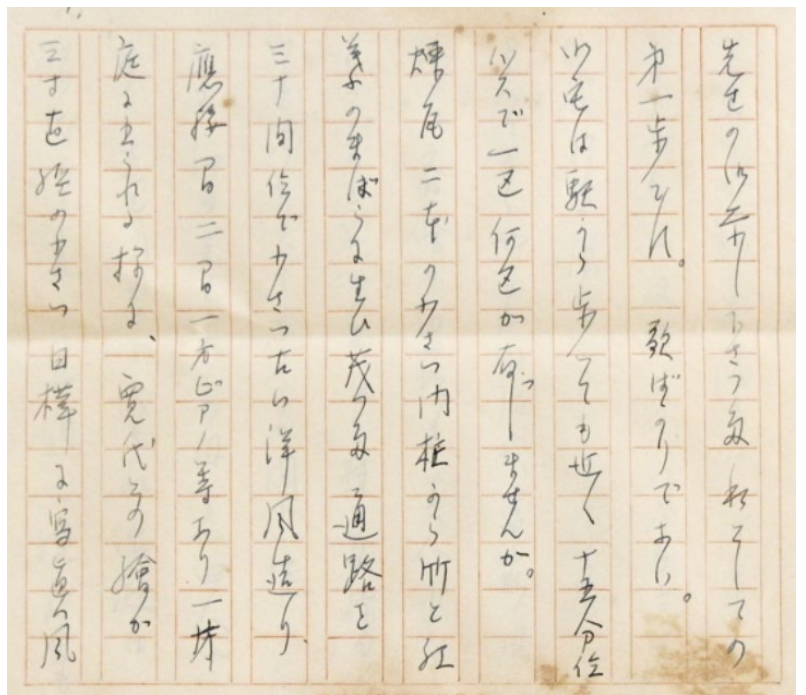
思ひません。身のまわりの浮ついた

拘が取れ、燃える様な感激はあり

ませんが、一歩くしみく歩め

る気持です。御安心下さい。





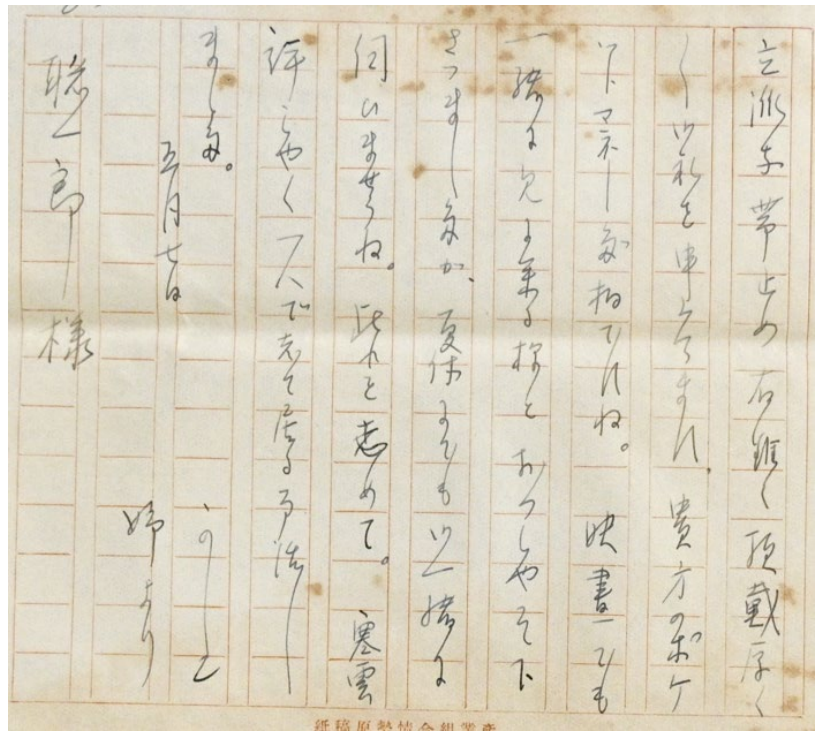
先生の御示し下さった私としての  
 第一歩です。歌ばかりでない。  
 御宅は、駅から歩いて近く十五分位  
 バスで一区何区か存じませんか。  
 煉瓦二本の小さい門柱から竹と紅  
 葉のまばらに生い茂った通路を  
 三十間位で小さい古い洋風造り  
 応接間二間一方ピアノ等あり一方  
 庭に出られる様に寛氏との絵か  
 三寸直径の小さい自樺に写真風

に画かれ、部屋隅には一寸高く  
 たゝみも二枚程にて御茶も立て  
 られる様に風呂がありました。  
 すべてさゝやかな明治式旧家風  
 氏は斉条の伯母様を美人でなく  
 してずっと英でた目を持った様です  
 御年頃も六十五才とか同じ位。  
 先生池田先生私木田さん四人で、  
 多く先生同志で話され話題は  
 源氏でした。毎週土曜歌会も



ある様ですか私には今出られません。  
夏休に遊びがてら御一緒に伺ひま  
せう。池田先生には乗物すべて  
御夕飯まで御世話になり大変相  
済まなく存じ居ります。御礼状  
も一寸出せません。聡一郎さん  
若しも私の世の中がちがつて居たら  
何の苦もなく全身を打ちこめる  
でせうに、私の道はひらけるでせうに。  
然し此れ以上の幸は、希望すべき

でもなく、又実際のぞみません。唯  
帰途静かな路を黙って先生と歩  
いて居りましたら、若い日の感激  
もなく今の情もなく、長い道を  
拾年も歩いて居る様に平和な気  
持でした。此れか(さがし)求めて居た私  
の道と云ふ。  
京都の初夏いかが、御元気の由  
御手紙、又昨日埼玉御母上様にも  
伺ひ嬉しく、折角御勉強下さい。



立派な帯止め有難く頂戴厚く

く御礼を申し上げます。貴方のポケ

ットマネーだ相ですね。映画でも

一緒に見に来る様とおっしゃって下

さいましたか、夏休にでも御一緒に

伺ひませうね。此れをしめて、寒雲

評しやく一人でして居る事話し

ました。

かしこ

五月七日

姉より

聡一郎様

# ○与謝野晶子と源氏と秋の虫

絵巻のために 源氏物語

横笛

亡き人の手馴の笛に寄りも来し夢のゆくへの寒き夜半かな

鈴虫

鈴むしは釈迦牟尼仏の御弟子の君のためにと秋を清むる

(与謝野晶子『流星の道』大正十三年刊行  
内容は 大正11年6月から大正12年6月まで)

・絵巻の為にとして、各巻の歌

・新訳、新新訳の作成

・失われた全講本

↓晶子は文化学院の焼失と共に数千枚書き綴られていた『源氏物語』に関する原稿を焼失した。

「私は曾て大正年間に「源氏」の全講本を書き初め、十年を費やして「宇治十帖」の前に至り、其稿本を震災に焼いたので、また筆を起す気にならず止めてしまつたのである。」

(藤田徳太郎『源氏物語要綱』不老閣書房 昭和3年)

大正の十二年秋帝王のみやことともにわれほろび行く

地震の夜半人に親しきこほろぎのよそげに鳴くも寂しかりけれ

焼けはてし彼処此処にも立ちまさり心悲しき学院の跡

十余年わが書きためし草稿の跡あるべしや学院の灰

かくてなほ無限の時をもつことに誇る自然のうとまじきかな

焦土よりすでに都の興るとよわれの築くはそれに似ぬかな

病より癒えつつ寂し大いなる水を渡りてこし身のやうに

箱根路の大涌谷の劫風の身に沁む罪をただ一つ持つ

夕ぐれは煙の質の薄とてうしろの山に紛れけるかな

鈴虫がいつこほろぎに変わりけん少しものなどわれ思ひけん

高山の秋草の原ゆふやけが紅き縁とりなまめかしけれ

はてもなき大地の月夜そことなく浮きただよる虫の声かな

しろがねにいまだ至らず初秋はつりがね草の色といはまし

こほろぎが清く寂しく鳴きいでぬ雲の中なる奥山にして

あるが中に恋の涙のわれもかうわれの涙の野のわれもかう

松山に鳶の臘脂のひろごりて秋の朝のすずしかりけれ

(与謝野晶子『瑠璃光』大正14年刊より 抄出)

内容 大正12年7月から大正14年1月まで)

#### ▼濱梨花枝 秋の表現

城址の樹々に来る秋しづかなる淵に映りて渦ひとつ逝く

逢ひたくばふるさとに來よ水引の紅風ゆらす風樹の嘆き

亡き母の声もまじれり碑のめぐり戦ぐ笹生に鳴く虫のこゑ

(『歌集 青遠 下 黒鳥のこゑ』『銀の川』より抜粋(角川書店、1997年))

※銀の川―長瀬く玉淀あたりの荒川の事をいう。 城址―鉢形城址

#### ○参考文献

・埼玉県立文書館『奥貫家文書目録』埼玉県立文書館 平成元年3月

・松尾聡「中古語としての「鈴虫」「松虫」」『源氏物語を中心とした紛れ易い中古語攷』平成3年

・白石良夫「鈴虫はほんとうにちんちろりと鳴いたのか」『佐賀大國文(38)』

佐賀大学教育学部国語国文学会 平成22年3月

・大明敦「昭和二十年代の濱梨花枝」『さいたま文学館紀要 第5号』さいたま文学館 令和7年4月

・久保田淳 馬場あき子『歌ことば歌枕大辞典』角川書店 平成11年

・鈴木一雄 永井和子『源氏物語の鑑賞と基礎知識(26)横笛・鈴虫』至文堂 平成14年

・柳井滋ほか『源氏物語 (6)』岩波文庫 令和元年